

第3部会

とすれば、それほど伝わりがたいものはないだろう。

しかし、この結論は完全に筋が通っている。「強い魂」を自分の内部から打ち砕かれた人間は、恐れや誘惑以外の、かつては持てると信じていた高い動機をもはや持ちえない。より正確に言えば、高い動機を持てると自負することはありえない。そのような人間が尊厳を回復しうる突破口はただ一つ、「いかなる動機も持たない」という可能性だろう。それは自分の人間としての構造を、つまり動機を自ら選択する自由を完全に放棄することであり、人間ではないものに、すなわち完全な物になることにほかならない。

ヴェイユが後に語る「超自然的な奇跡」としての「動機なき行為」は、この尊厳に深く関わっている。しかし、このような行為が本当に可能なのか。ヴェイユが見出した尊厳の可能性は何を意味しているのか。こうした問題については、また別稿で考察してみたい。

ジャック・デリダの『コーラ（場）』

〈第三のもの〉を読む

斎藤 明典

「場」、「場所」については多く語られているが、ジャック・デリダの『*Khora*』（一九九三年）は、他の「場所論」とは異なる視点を提示している。デリダはプラトンの『ティマイオス』における、第三のものとしての「コーラ（場）」に、彼の

脱構築的読解と、また政治的・倫理的意味を問うものとして、その手がかりとなる〈異質性〉を見出した。「プラトンがコーラの名で指し示しているものは、〈然りか否かの二項性の論理〉に挑戦しているように見え」、「ロゴスの論理とは別の論理」に属するもの、さらに、「コーラは感性的でも叡智的でもなく、第三の類（ジャンル）に属している」、そして「叡智的で不変のモデルたる〈模範（パラディグマ）〉の領界にとって異質であるように見える」と述べている。

プラトンは、『ティマイオス』において、イデアとイデアを分有するものの二つの世界と異なる第三のものを、やや唐突に提起している。宇宙の構造—国家の制度—自然的人間、これらに通じる秩序の作られ方・あり方が描かれ、「常にあるもの」、生成ということをしなないものと、また、常に生成していて、あるということの決してないもの」と、二種のものが挙げられる。そして先にあげたものでは不十分だったとして語られる第三のものは、「あらゆる生成の、いわば養い親のような受容者」である。

ティマイオスは何度も表現を変えながら、三つの種族の性質・働きについて説明を繰り返した後、その終わりがらになって、「いつも存在している〈場〉の種族」を登場させ、ここで初めて使われた〈場〉が *chora* である。「これは滅亡を受け入れることなく、およそ生成する限りすべてのものにその座を提供し、しかし自分自身は、一種の擬いの推理とでもいうようなものによって、感覚には頼らずに捉えられるもの」と述べる。デリダは、これはプラトンが開いた深淵・亀裂であると見た

が、この亀裂は『テイマイオス』の結論部分で覆い隠されたと読み取った。

「場所」は、エドワード・ケーシーによると、西洋哲学・形而上学において長く忘れられ、眠り込まれるままになっていた。それは、中世の間に場所が空間に敗北したためであるという。アリストテレス以来の場所と空間の勢力争いに決着がついたというわけであるが、ケーシーが勝ったとする空間はプラトンによって提起され、そして、デリダが注目したコーラではない。コーラもまた眠っていたのだ。アリストテレスは『自然学』の中に、「場所」を存在の第一のものとして置いた。そして「コーラ」は「空間」に棚上げされてしまい、「場所」復権の現代、コーラを引きながらもトポスに基礎を置いて、第三のものと名づけられることなく語られることになった。

第三のものはプラトンが語ったように第一のものと第二のものとを結びつける。この対立する二項——たとえば、敵と味方、強者と弱者、支配する者と支配される者——の解として、コーラが考えられるのではない。デリダは、「コーラについての言説は、類 (genos) というものについての、そしてさまざまな種類のジャンルについての言説でもある」と言う。「コーラ」、「場」を考えることは、類 (le genre) について、対立するジャンルのある世界を思い描くことである。私たちがコーラ(場) Ⅱ第三のものを思考するとき、人の生活の場への到来、居住についての問いを誘発する。息詰まるような二項のみの在り方から、第三者のあることによる第三者に限定しない自由と多様性への広がりも視野に入る。

L・シュトラウスによる

F・ローゼンツヴァイク批判の射程

佐藤 貴史

近年、レオ・シュトラウスの思想はわが国においても積極的に論じられるようになったが、そのきっかけの一つとして、彼を前アメリカ大統領の「知的ゴット・ファーザー」とみなす傾向をあげることができるだろう。

しかし、本発表の目的は、シュトラウスの思想と現実政治との関係ではない。そうではなく、ヴァイマル時代のシュトラウスと彼に大きな影響を与えたフランク・ローゼンツヴァイクの関係、とくにシュトラウスによるローゼンツヴァイク批判の内実とその射程を測定することで、シュトラウス自身の問題意識の一端を明らかにすることである。

シュトラウスにとってローゼンツヴァイクは、二〇世紀初頭のドイツにおけるカール・バルトとならぶ「神学復興」の立役者の一人であった。しかし、シュトラウスにとってローゼンツヴァイクによる「聖書の啓示への無条件の回帰」は「無条件の回帰」と呼べるものではなかった。曰く、「彼が回帰したユダヤ教は、モーゼス・メンデルスゾーン以前のユダヤ教とは同一のものではなかった」。ローゼンツヴァイクの「新しい思考」は、「新しい」といいながらも、結局のところ「古い思考」に囚われていたのである。シュトラウスは、そのしるしをローゼンツ